

⑮ 自祝摺

自祝

七むかし過てもよしや花の春
 齒朶うら白に賑はしき軒
 肩衣の背中ふくらす東風風て
 咲くなれば人も待せず梅の花
 八重と見て分入霞ひとへかな
 初空やすみも濁りもせぬ光り
 うくひすに人やこゝろのとけ初る
 はつ夢や膳最中に聞たかる
 また暮ぬうちから何を嫁か君
 うれしさは二日も同じ明からす
 蝶は皆おなしこゝろかむつまじき
 葉にたまる夜の埃りや福寿草
 きふのふも来て鳴足すや春の鳥
 ふり分て見せけり水としら魚と
 身のほとおもひくらはよ花の春
 往かへり尽せぬ三つのあしたかな
 来た道をもとるてもなき梅見哉
 七ふしのあるは稀なりつくくし
 梅か香に乾き果けりにわたすみ
 松は皆雪に根ふかき子の日かな
 行燈のつく迄遊ふ子の日かな
 砂原や流れさためぬ芦の角
 鶯の来なれて庭のうるはしき
 万才や古き言葉の古からず
 菜の花やつまんで呉る烟草にも
 暮きらぬうちにはつかり梅の月
 三日月に朧ふくみぬ遠洲崎
 おもふ事柳くゝりてわすれけり
 見へるとて万才告に子のもとる
 七種や是とかきらぬよき匂ひ
 はる風や野は高低の小松こし
 垣こしに田の見はらしや飾焚
 笑ふのも嘉例になるや削かけ
 陽炎や一日あそふ鶏の雛
 うくひすや初音わつかに二三声

夢庵 雲庵 一具 由誓 逸淵 西馬 尋香 臥春 北松 一具 御風 禾月 宗古 一止 多代女 清民 東里 菊也 少也 丁酉 仲介 英泉 高壽 薰風 斗翫 于齋 鬼川 紫山 旭山 處溪 文鶴 雀笑 蘭臺 花霞 柳城

庵に灯はなくて明るし月と梅
 老し身も花には若き吉野かな
 すらくと夜のはなれたる柳哉
 鶯の声にはこらぬ初音かな
 よきほと風のあたりや藪の梅
 三日月を後に花のもとり哉
 老ふりも見へて若やく柳かな
 風すちの野に広がるや春の水
 川越て曳も嘉例の小松かな
 雪除によき松ありて福寿草
 年ふりし松や子の日の曳残り
 和らかに空吹かせやはつ日影
 撰分て猶香の深し磯若菜
 きし鳴や硯のかはく芝の上
 海苔の砂撰のみ朝の仕事哉
 熊笹も香のありさうな雪解かな
 夜の雨のつやく残る木の芽哉
 杳音のかるき日和や梅の花
 うれしけに立や初日の宮千鳥
 いま踏た草に見ゆるや別れ霜
 延る日のかげや柳の戸口まで
 たつた今月見て寐たに□んと哉
 初夢や笑ふた顔の今にまで
 春の江や暮おしさうに鴛鴦二つ
 江の上や風のわたりて長閑なる
 教しへたるまゝに子供御慶哉
 蛤の汐吹あける日和かな
 雪のうへこほる、梅のほひかな
 凧ひとつ広野にあまるうなり哉
 梟の声ほのかなりおほろ月
 餌を拾ふ鳥の居並ぶ雪解かな
 しつかさや竹を見こしの春の月
 蝶舞や機家の窓の明はなし
 明なから雨は止みけり日の霞
 しら梅やものによこれぬ朝心
 かくれ家を浮世めかすや御万才
 常に似ぬ老のちからや小松引
 若水やまた足もとは星明り

蝶衾 梅徑 硯峰 澄月 桃溪 井田 一露 輕舟 蛙喉 戲固 銀砂 如猿 倉山 如江 白瑛 南鶴 石樵 其秀 常鳥 松橋 秀甫 左文 風志 芳村 朴齋 帆中 可曾宜 つき をさむ 素雪 兎月 水也 簾月 一簑 宗海 梅香 泉山 松風